

広報しばやまはおかげさまで



号

昭和47年、産声をあげ誕生した「広報しばやま」。創刊から44年を迎えた今号で500号を数えることになりました。そこで、これまでの足跡を振り返りながら、制作過程を紹介します。

空港と広報紙

建設が閣議決定されてから今年で50年の節目を迎える成田国際空港。この空港建設をめぐる、町中が揺れていた昭和47年6月、広報しばやまは生まれました。当時の手島孝一町長は町の現状を憂い、「町民全員に町の考え、町の状況を正確に伝え、理解してもらおうには広報紙しかない」と決断し、記念すべき第1号を創刊しました。

手島町長みずから筆を取り、担当者と一緒に作り上げた創刊号はB5版の8ページで、活字を組み合わせて版を作る「活版印刷」で印刷されました。その後しばらくは不定期な発行が続く、緊急な重要案件があれば臨時号も発行されていました。現在のように定期的な発行となったのは昭和52年5月発行の第34号から。その後は毎月休むことなく、町民の皆さんに情報を発信し続けています。

広報ってどうつくるの？

広報しばやまができるまで



Step1 企画・情報収集

町民の皆さんに伝えたいこと、伝えなければいけないことを考えます。町民の方から寄せられた情報をネタに取材することもしばしば。皆さんの協力なくして広報作成のスタートは切れません！

Step2 取材

夜でも休日でも、広報担当者が直接取材に向きます。現場の雰囲気や「肌」で感じ、その感じたままを記事にするよう心掛けています。取材現場で出会ったら気軽に声を掛けてください！

Step3 編集

広報担当者は一人でカメラマン、ライター、編集者の仕事をしなければいけません。現場で

広報しばやまの歴史



第 388 号 (平成 18 年 12 月 1 日)
ページ数 : 40 頁

22 ページもの紙面で成田空港建設の歴史について特集を組んだ「特集 大地と大空」を掲載。今号は全国広報コンクールにおいて 1 席に入選し、「広報しばやま」の名を全国に押し上げました。



創刊号 (昭和 47 年 6 月 20 日)
ページ数 : 8 頁

記念すべき創刊号の名称は「芝山町報」。成田空港の開港を間近に控え、航空機騒音に不安を持つ町民への情報提供や、急ピッチで進む騒音対策事業などの様子を、大きな枠で取り上げていました。

第 440 号 (平成 23 年 4 月 1 日)
ページ数 : 28 頁

東日本大震災の直後に発行された今号から、表紙が現在と同じものになりました。紙面は中学校卒業式の様子や震災時の町内の被害状況が掲載されました。



第 105 号 (昭和 58 年 4 月 10 日)
ページ数 : 16 頁

この号から名称が現在と同じ「広報しばやま」に。見開きで昭和 58 年度予算について取り上げ、一般会計予算は 19 億 1472 万円、町民一人当たりの支出額は 23 万 578 円とあります。8～9 ページの今年度予算と比べるとその違いにビックリ。



そして第 600 号に向かって…

空港建設に町が揺れていた時期、町の状況を的確に町民へ伝えるためにスタートした芝山町の広報紙。これからも創刊時の理念を忘れず、町民の皆さんは何を知りたいのか、何を伝えればいいのか考え試行錯誤し、皆さんに愛される広報を目標に 8 年 4 ヶ月後の第 600 号へ向かって歩いていきます。



第 333 号 (平成 14 年 5 月 1 日)
ページ数 : 26 頁

第 260 号から 2 色印刷になった広報が、ついにフルカラーになりました。特集として「新世紀 飛躍する芝山」と題し、オープン間近の芝山鉄道や第一クリーンセンターを取り上げて、未来に向けて変ぼうしていく芝山町を描き出しました。

Step4 入稿・校正
仕入れた情報を元に文章を練り、撮影した写真をどう配置するかレイアウトを考えます。この作業が一番地味で大変です…。

Step5 印刷・仕分け
編集したものを印刷業者に渡すことを「入稿」、印刷業者が作成した仮刷りを確認して修正することを「校正」といいます。間違いがないよう、広報担当者 2 名で隅から隅までチェックします。

Finish! 納品
印刷業者で 26000 部印刷された後、町福祉作業者の皆さんの手によって区ごとに梱包されます。

毎月 1 日 (土日の場合は直前の金曜日) に納品され、その日のうちに各区長さんへ届け、各家庭への配布をお願いします。

